

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月7日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04518

研究課題名(和文) 帝国大学における研究者の知的基盤に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Intellectual Foundation of Imperial University Researchers in Japan

研究代表者

吉葉 恭行 (Yoshiba, Yasuyuki)

岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・教授

研究者番号：50436177

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦前期から戦中期という環境が大きく変化した時期の帝国大学における個々の研究者らの思想と知的営為(研究や大学行政、社会活動等)やその源となる「知的基盤」についての解明・考察を歴史学的手法により試みた。本研究では、研究者の思想の背景にあるもの(学問的素養・組織体制・人的関係など)を「知的基盤」と総称することとしている。

研究成果として、各研究者らが抱いた学術の発展と大学としての総合性・統合性を志向する思想が、国家の総力戦体制と接合的であったことが、ある程度可視化できた。これら思想の源となった「知的基盤」の主要要素として、人間関係、教養、宗教、研究環境を抽出・確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、帝国大学における研究者らが、戦前期から戦中期という外的要因が大きく変化した時期に、内的にどのように適応したのかについて、「知的基盤」という新たなキー概念を設定し、教育史、日本史、日本思想史、科学史といった研究分野から総合的に考察した点にある。

これらの研究成果は、教育史を含む教育学分野や、科学史、日本史、日本思想史などの関連研究分野に提供されることにより学術的波及効果が期待される。くわえて現代や将来の研究者の有り様について再考するための新たな視座が提供されることが期待される。

研究成果の概要(英文)：In this research, we tried to clarify and discuss the problem by historical method about the thought, intellectual service and "the Intellectual Foundation" that formed the thought of individual researchers in Imperial University in the period when the environment changed largely from the pre-war period to the war-mid-term. In this research, we defined what is in the background of the researcher's thought (academic culture, organizational system, personal relationship, etc.) as "the Intellectual Foundation".

As a result of the research, we could visualize to a certain extent that the thought that the academic development and aims to be integrated as a university that each researcher possessed was junctional with the national total war system. We were able to extract and confirm human relations, liberal arts, religions, and research environment as the main elements of the "the Intellectual Foundation" that became the source of these thoughts.

研究分野：科学技術史

キーワード：教育史 大学史 日本史 日本思想史 戦時研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦時下の科学技術政策とその実施に伴い形成された帝国大学の研究体制は、戦後の科学技術政策と大学の研究・教育のあり方に多大な影響を及ぼしたことは想像に難くない。しかしながら、西山伸氏が指摘するように、戦時下の大学において行われた実際の研究・教育のあり方は、ほとんど明らかにされていない(西山伸「大学沿革史の課題と展望」『日本教育史研究』26、2007)。

これまで理工系や医学系における大学と戦争のかかわりについてのいくつかの事例研究はあったが、個別・断片的なものであった。また近年では、戦時下に設立された技術院所轄の研究隣組や文部省所轄の学術研究会議研究班についての研究が進展したが、それらの研究は、全国の研究機関横断的な共同研究組織体形成の契機としてとらえたものであり、帝国大学内に組織された研究組織や具体的な研究内容は明らかにされていない(青木洋「第二次世界大戦中の科学動員と学術研究会議の研究班」『社会経済史学』72(3)、2006など)。

文科系の学問統制や動員について包括的研究を試みた労作もあるが、主として日本諸学振興委員会における議論や報告書について検討したものであり、各帝国大学内の研究組織や具体的な研究内容について検討したものではなかった(駒込武ほか編『戦時下の学問の統制と動員』2011)。

このように、戦争と大学とかかわりに関する研究は進展しつつあるが、各帝国大学における個別具体的な研究組織の形成や、実施された研究については明らかにされていない。ましてや、国策としての戦争に様々な形で協力した帝国大学の研究者たちが、いかなる思考や意図のもとで戦時研究に携わり、研究体制の形成に関与してきたのか、などの研究者の意識構造にせまるまとまった研究にいたっては皆無に等しい。研究組織体としての帝国大学の本質を見定めるためには、組織体のみならず、組織体の構成要素である各研究者の思考やその源である「知的基盤」を明らかにし、それらを総体的に検討する必要がある。なお本研究の開始当初、各研究者の専門分野における知識・認識の体系のみならず、専門分野外の知識・認識の体系をも含む概念を「知的基盤」と定義していた。

2. 研究の目的

本研究では、帝国大学時代における各研究分野や所属大学において主要と思われる、かつ比較的多くの資料が入手可能である研究者を抽出し、彼等の学歴や経歴はもとより、文書・著作物を分析することにより、彼らの思想やその源となった「知的基盤」について検討を加える。

そして、明らかにされた帝国大学の研究者の思想や「知的基盤」について、教育史、日本史、科学史、思想史といった多面的な観点からさらなる考察を加え、研究者等が、戦前期・戦中期の帝国大学の教育・研究や研究体制の形成過程において果たした役割が、いかなる思想のもとでなされたのか、またその「知的基盤」がいかなるものであったのか総合的に検討を加えることを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 個別の帝国大学研究者(教員)の分析(思考・知的基盤)

個人文書・著作物調査: 所在が明らかになった関係文書や著作物を収集し、あるいは必要箇所の複写を実施した。また、必要な文献・図書の収集を実施した。

個人文書・著作物分析: 研究分野に応じ、研究代表者と研究分担者が手分けし、帝国大学の研究者の思考や「知的基盤」について分析を行った。分析の対象となる研究者は理工系や社会科学系、人文科学系など多岐にわたるため、代表者・分担者がそれぞれ専門に近い研究分野の研究者について分析を行った。分析手法の共通性を担保するために、日本思想史を専門とする分担者を中心に分析スタイルを検討した。なお、研究会において「知的基盤」の定義について議論を重ねた結果、「研究者の思想の背景にあるもの(学問的素養・組織体制・人的関係など)」と再定義された。

(2) 個別研究結果の多面的考察 個別研究者分析結果の考察:(1)で明らかにされた帝国大学の研究者の思考や知的基盤について、教育史、科学史、思想史といった多面的な観点から考察を加えた。

(3) 個別研究結果の総体的考察: 個別分析結果の総括・総体化、研究組織体としての大学の総括 明らかにされた帝国大学の個別研究者の思考や知的基盤について、それらを共通点や相違点を踏まえつつ、研究組織体としての帝国大学のあり様について総体的な考察を加えた。

4. 研究成果

本研究では、戦前期から戦中期という環境が大きく変化した時期の帝国大学における個々の研究者らの知的営為(研究や大学行政、社会活動等)やその源となる「知的基盤」についての解明・考察を歴史学的手法により試みた。本研究では、研究者の思想の背景にあるもの(学問的素養・組織体制・人的関係など)を「知的基盤」と総称することとしている。

戦前期から戦中期における帝国大学の研究者らの「知的基盤」形成について、包括的に考察検証を進めていくためには、彼らの帝国大学在職中の知的営為を分析することは無論のことであるが、彼らが帝国大学の研究者となるための主要な登竜門とみなされた旧制高等学校を「知

的基盤」形成の場の一つとして考察する必要があった。そこで、旧制高等学校の教育環境について解明・考察する班（旧制高校班）と、帝国大学の個別の研究者の知的営為とその「知的基盤」を解明・考察する班（帝国大学班）を設けることとした。

(1) 旧制高校班

第四高等学校校長溝淵進馬（1871-1935）と、第二高等学校校長阿刀田令造（1878-1947年）の教育方針に着目して、当時の高等学校生徒らにとって先人・師としていかなる教育的な存在と認識され、どの様な教育方針によって生徒を導き、将来の研究者たる生徒にいかなる「知的基盤」を形成させたのかなどを明らかにした。

高等学校生徒の「知的基盤」形成の場として重要な位置を占める寄宿寮において、寮生たちがいかなる「知的基盤」を形成しつつ、自治的生活を送っていたのかを明らかにした。

(2) 帝国大学班

東北帝国大学法文学部初代学部長であり、法文学部の設置準備段階から教育カリキュラムなどを設計してきた佐藤丑次郎（1877-1940）の教育理念について、佐藤の学問的修養と経験、いわゆる「知的基盤」が、佐藤の法文学部構想にどのような影響を与えたのか、また彼の教育理念の根底にはどのような「知的基盤」が存在していたのか、その一端を明らかにした。

東北帝国大学理学部生物学教室の初代主任教授を務め、東北帝国大学の学術研究体制の整備に尽力した人物である畑井新喜司(1876-1963)が、いかなる教育研究思想の下で東北帝国大学の学術研究体制の整備に尽力したのか、そしてその教育研究思想の「知的基盤」を明らかにした。

東北大学や京都大学所蔵の評議会議事録や概算要求等の一次史料の分析により、戦時期の帝国大学が「知的基盤」としていかなる研究体制像を描いていたのか、その一端を明らかにした。

戦中期に最も多くの附置研究所を新設するなど、研究体制を構築してきた東北帝国大学の総長としてリーダーシップを発揮した熊谷岱蔵（1880-1962）の思想から検討し、その思想形成の礎となった「知的基盤」の解明を試みた。

歯車研究において著名である東北帝国大学工学部教授の成瀬政男（1898-1979）の戦時研究上の位置付けを確認し、また「楔」と結び付いた科学技術思想が戦中期の大政翼賛会運動に連なって行く様を明らかにし、そしてその思想を形作った「知的基盤」の解明を試みた。

東北帝国大学法文学部において日本思想史研究や教育に従事し、また、日本思想史という学問分野の創設者の一人として知られている村岡典嗣（1884-1946）の「知的基盤」について、主に「人間関係」、特に学問的素養に焦点を当て、「反対の調和」という言説に注目することにより、村岡の「知的基盤」について考察を行った。

以上の研究から、各研究者らが抱いた、学術の発展と大学としての総合性・統合性を志向する思想が、国家の総力戦体制と接合的であったことが、ある程度可視化できたと考えられる。また、この様な思想の源となった「知的基盤」の主要な要素として、人間関係、教養、宗教、研究環境を抽出・確認することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

吉葉 恭行、宮城音五郎の科学技術思想について—戦間期の著述活動を中心に—、東北大学史料館紀要、査読無、第 14 号、2019、pp.63-79

DOI :

本村 昌文、資料紹介 村岡典嗣「Herakleitos」、東北大学史料館紀要、査読無、第 14 号、2019、pp. 21-34

DOI :

小幡 圭祐、熊谷岱蔵と戦時期東北帝国大学の事務改革—東北大学史料館所蔵式辞草稿の検討を中心に—、東北大学史料館紀要、査読無、第 14 号、2019 年、pp.51-61

DOI :

吉葉 恭行、成瀬政男の科学思想・技術思想について—戦時下の著述活動を中心に—、東北大学史料館紀要、査読無、第 13 号、2018、pp.1-11

DOI : 1881-039X-2018-13-1.pdf

米澤 晋彦、畑井新喜司による東北帝国大学における学術研究体制の整備、東北大学史料館紀要、査読無、第 13 号、2018、pp. 13-27

DOI : 1881-039X-2018-13-13.pdf

加藤 諭、大学アーカイブズにみる戦前・戦後期の記録—東京大学史料室と学徒動員・学徒出陣に関する調査—、東北学院史資料センター年報、査読無、3 号、2018、pp.10-20

DOI :

吉葉 恭行、成瀬政男の戦時研究と科学思想・技術思想についての一考察—『ドイツ工業界の印象』を中心に—、東北大学史料館紀要、査読無、第 12 号、2017、pp.37-50

DOI : 1881-039X-2017-12-37.pdf

中村 覚、稗方 和夫、満行 泰河、加藤 諭、宮本 隆史、高嶋 朋子、『文部省往復』

を中心としたデジタルアーカイブの構築とその活用、東京大学文書館紀要、査読有、第 35 号、2017、pp.30-43
DOI : <https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400061599.pdf>

〔学会発表〕(計 12 件)

加藤 諭、Planning Research Institutes at Imperial Universities in Wartime Japan、4th AAWH Congress in Osaka(Asian Association of World Historians)(国際学会) 2019
吉葉 恭行、成瀬政男の技術思想について - 戦時下の著述活動と人的ネットワークを中心に -、日本科学史学会第 65 回年会 (東京理科大学・東京葛西) 2018
本村 昌文、「日本精神論」の展開と村岡典嗣、日本科学史学会第 65 回年会 (東京理科大学・東京葛西) 2018、
加藤 諭、戦時期帝国大学の附置研究所設置構想 ~ 京都帝国大学・東北帝国大学の事例を中心に ~、日本科学史学会第 65 回年会 (東京理科大学・東京葛西) 2018
加藤 諭、戦時期日本の帝国大学における研究所体制整備と構想、第 3 回東アジア日本研究者協議会国際大会 (国際学会) 2018
加藤 諭、第二次世界大戦時・戦後の東北大学と科学研究動向 ~ 理学部の動向を中心に ~、第 4 回気象学史研究会、2018、招待講演
谷本 宗生、「第四高等学校長溝淵進馬と第二高等学校長阿刀田令造の教育方針」、日本科学史学会第 65 回年会、2018
米澤 晋彦、「畑井新喜司の東北帝国大学における教育研究思想とその背景」、日本科学史学会第 65 回年会、2018、
小幡 圭祐、熊谷岱蔵と戦時期東北帝国大学の研究体制構築、日本科学史学会第 65 回年会、2018
石澤 理如、佐藤丑次郎と東北帝国大学—法文学部初代学部長としての教育理念、日本科学史学会第 65 回年会、2018
吉葉 恭行、成瀬政男の技術思想について、日本科学史学会第 64 回年会 (香川大学・高松市) 2017
本村 昌文、村岡典嗣と古代ギリシア哲学—プラトン『国家』をめぐって—、第 3 回蘭州大学日本語・日本文化研究会 (蘭州大学・中国蘭州市) 2016、

〔図書〕(計 1 件)

谷本 宗生、成文堂、学都金沢形成の様相—近代日本官立高等教育機関の設置過程—、2018、170 ISBN : 978-4-7923-6111-2

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名 : 本村 昌文

ローマ字氏名 : Motomura Masafumi

所属研究機関名 : 岡山大学

部局名 : 大学院ヘルスシステム統合科学研究科

職名 : 教授

研究者番号 (8 桁) : 80322973

研究分担者氏名 : 加藤 諭

ローマ字氏名 : Kato Satoshi

所属研究機関名 : 東北大学

部局名 : 学術資源研究公開センター

職名 : 准教授

研究者番号 (8 桁) : 90626300

研究分担者氏名 : 谷本 宗生

ローマ字氏名 : Tanimoto Muneo

所属研究機関名 : 大東文化大学

部局名 : 東洋研究所

職名 : 特任准教授

研究者番号 (8 桁) : 90301192

研究分担者氏名：小幡 圭祐

ローマ字氏名：Obata Keisuke

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：経済学部(三田)

職名：特別研究員(PD)

研究者番号(8桁)：30770127

研究分担者氏名：米澤 晋彦

ローマ字氏名：Yonezawa Kunihiko

所属研究機関名：秋田工業高等専門学校

部局名：創造システム工学科一般教科人文科学系

職名：准教授

研究者番号(8桁)：30824974

(2)研究協力者

研究協力者氏名：田中 智子

ローマ字氏名：Tanaka Satoko

研究協力者氏名：石澤 理如

ローマ字氏名：Ishizawa Ayayuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。